

19

合田強の『医道聞書』について

板野 俊文

香川大学

江戸中期の讃岐の医家である合田強(求吾)(1723~1773)は『医道聞書』(未刊)を書き残している。この書は、自身が学んだ人々の講義録であり、また学習の覚えでもある。この書には当時の著名な古方派の人々のことが書かれている。古方派の四大家といえ、いくつかの説があるが、香川修徳、山脇東洋、松原一閑齋、吉益東洞と云われている。この内、同時代の三名が登場する。当時の古方派の業績は不明な部分が多いので、これらを知る上で、『医道聞書』は重要な書であろう。

発表者は、既に合田強の業績を報告している。これらは主に寶暦十二年(1762)に長崎遊学に関するもので、吉雄耕牛の成秀館の蘭学の学修に関するものである。今回はそれ以前の寶暦二年から十年に亘って書かれた『医道聞書』について報告する。

最初に資料採取中に判明したことについて記す。この自筆の原本は香川県立ミュージアムに所蔵されている。コピーされた製本は、香川大学図書館医学部分館(香大本)と、香川県立図書館に所蔵されている。写本(福家利三太写, 昭和七年)は鎌田共済博物館に所蔵(鎌田本)されている。ところが、鎌田本は二種類の『医道聞書』からなることがわかった。今、これを『医道聞書 前』と『医道聞書 後』と暫定的に名付ける。現在、他の施設に所蔵されているのは、全て後編のみで、前篇は原本の所在が不明である。

以下に作成した年代と訪問した師匠等を記す。

『医道聞書 前』(十四丁)

寶暦二年(1752)より約二年間 松原一閑齋(京都) 合田強は三十歳

『医道聞書 後』(二十五丁)

寶暦六年(1756)正月より 望月三英(東都), 加藤宗因(姫路), 志賀委心(姫路), 山脇東洋(京都), 山脇復所(京都) 合田強は三十四歳

寶暦七年(1757)春より2, 3か月 山脇東洋(京都), 吉益東洞(京都) 合田強は三十五歳

寶暦十年(1760)二月三月 山脇東洋(京都), 原 雲庵(膳所), 渡辺毅(京都), 原洲庵(京都), 人物不明の老先生(堂島仁亭) 合田強は三十八歳

前編はおそらく二年としたが、これは修業期間をそのまま用いた。この中で、松原一閑齋の記述は他に例を見ないものである。一閑齋は生前自らの著述を残さなかった。その理由は、一閑齋の「醫術はただその人の自得にあって、書籍に載せて伝えることはできない」というものであった。

後編は表紙裏にある文より、

「宝暦六年丙子正月 歴姫路過京師至于東都矣故三處之醫言」

三都市を巡るとあるが、京都での記述が圧倒的に多い。

また、古方派では、並河天民、松原一閑齋、吉益東洞という流れと、後藤昆山、山脇東洋、永富獨嘯庵という流れがあるとされる。しかし、吉益東洞は山脇東洋の推挙で出世したとされるし、合田強は山脇東洋の『外臺秘要方』の校正に携わり、また、後に永富獨嘯庵には長崎遊学を進めるなど、両派の交流があったことがうかがわれる。

両本の翻刻がほぼ完了したので、さらに詳細な概要を報告する予定である。